働く自分を守るために

経営学部
遠藤公嗣 教授

1

『ブラック企業――日本を食いつぶす妖怪』
今野晴喜
（文藝新書、2012年）

今野晴喜著
『ブラック企業――日本を食いつぶす妖怪』

かつての日本企業は、正規従業員になるべく恵まれた待遇を与え、また、なるべくクビにしないで雇用を保障し、そのかわりに、正規従業員が、長時間の残業や休日出勤も断らないで、会社のために一生懸命に働くことを求めた。日本的雇用慣行とか日本的雇用システムとかの言葉で知られ、賞賛されたものだ。いまは違う。待遇はよくないのに、会社のために一生懸命に働くことだけを正規従業員に求める。そのため正規従業員が体をこわすと、口実をみつけて自主退職を誘導する。正規従業員を使い捨てる企業が増えたのだ。こういう企業を「ブラック企業」と呼ぶ。若い学生は、その見分け方や身の守り方を知ってほしい。それ以上に、知的活動が活発な大学生ならば、日本の社会システムが大変化しているのだ、という社会観をもってほしい。著者は1983年生まれの現役大学院生だ。

＊＊＊

戸室健作著
『ドキュメント　請負労働180日』

非正規で働く従業員は、どの企業でも、どの職場でも増えている。非正規従業員の存在と増加は、かつて日本的雇用慣行が賞賛されていたときは注目されなかったが、これも日本の社会システムの大変化のひとつとして、いまは注目されている。でも、その実際は、案外と知られていない。著者は、非正規従業員の一種である請負労働者として、計180日を工場で働いた。そして、製造業の工場の現場でどのように請負労働者が働いているのかを克明に描くとともに、請負労働者がつくっている人的ネットワークのユニークな機能を発見した。著者は1978年生まれで、請負労働者として働いたとき、明治大学大学院経営学研究科の院生でもあった。生産システムや雇用関係などの専門知識があったため、観察と分析は鋭いものがある。著者は、いまは山形大学の専任教員だ。

＊＊＊

2

『ドキュメント 請負労働180日』
戸室健作
（岩波書店、2011年）

3

『仕事と暮らしを取りもどす――社会正義のアメリカ』
遠藤公嗣・筒井美紀・山崎憲
（岩波書店、2012年）

遠藤公嗣・筒井美紀・山崎憲著
『仕事と暮らしを取りもどす――社会正義のアメリカ』

社会システムが大変化しているのは、アメリカも同じだ。そして、日本では知られていないけれども、その変化にたいして、仕事と暮らしを守る活動、取りもどす活動を、アメリカのNPOなど諸組織が盛んにおこなっている。労働者側だけでなく、経営者側も、行政側も、多様な宗教家も、大学所属の研究者も、それぞれが創意と工夫をこらして活動している。また、日本でまったく認識されていないので特筆したいけれども、その創設者にも職員にもインターン学生にも、若い女性が多い。性別は違うが、今野晴喜や戸室健作は彼女らの日本バージョンに近いだろう。この本は、それらNPOなど諸組織をアメリカ全土に訪問インタビュー調査した報告書だ。この本から、アイデアと希望と挑戦するスピリットを、日本の若い学生は得てほしい。著者の一人は私で、おなじく山崎憲は明治大学博士（経営学）だ。

（えんどう・こうし）明治大学経営学部教授。経済学博士（東京大学）。著編著に、遠藤公嗣編著『個人加盟ユニオンと労働NPO――排除された労働者の権利擁護』（ミネルヴァ書房、2012年）、遠藤公嗣ほか著『労働、社会保障政策の転換を』（岩波書店、2009年）、遠藤公嗣『賃金の決め方・賃金形態と労働研究』（ミネルヴァ書房、2005年）、遠藤公嗣『日本の人事査定』（ミネルヴァ書房、1999年）、遠藤公嗣『日本占領と労資関係政策の成立』（東京大学出版会、1989年）など。